

## 改めて考える友好都市

吉川 孝子

2012年に成都市に「広島・四川経済交流促進事務連絡室」が開設されてから5月24日で5周年になります。近年、成都、重慶の皆様から「成都や重慶には広島からどのような企業が進出していますか？」と尋ねられることがよくありますが、まだまだ多くの企業をご紹介するまでには至っていないのが現状です。今回、改めて中国西部地区と広島がどのような経緯を得て今日の繋がりがあるのか振り返ってみます。

1972年日中国交正常化（本年度で45周年）を契機とする日中両国の友好関係とともに、1984年広島県が四川省と友好提携を行いました。当時重慶市は四川省に属していたことから1985年広島市で展開された世界的な反核運動である「第一回世界平和連帯都市市長会議」に重慶市の肖秧市長が出席したことが今日の固い繋がりの第一歩となり、1986年10月23日に、重慶市長及び人民代表大会関係者を広島に招待し、友好姉妹都市協定が広島において締結されました。協定書には「…諸分野で協力と交流の実現に向けて努力する」と謳われております。それ以来「友好」と「緊張」が著しく変化する国家関係の中で30年が過ぎた今日、民間国際交流や青少年交流を通じて広島との日中間の友好都市交流は意義深い責任と義務を担うまでの位置づけになっています。

今後、今迄の友好関係を壊すことのないよう文化、経済ともにメディアの報道に惑わされることなくしっかりと企業間の交流を行うことがますます必要になってくるのではないかと思います。

30代から40代の若者が諸外国の留学を終えて帰国し、特に日本で学んで来たグローバルなビジネスモデルを参考に従来の中国の自己中心的な商習慣を改善し、世界に通用する発想の中で世界中のネット網を利用してビジネスを展開しつつあります。

このような中、日本の中小企業さんの技術やノウハウが今まで以上に西部地区でも重要視されております。机上での計算ではなく行動に移さなければ生き延びれない時代に入っております。尻込みすることなく、現地の状況を、生の声を聞きに現地に足を運んで頂けたらと思います。